

残夏

青い柚子の実が名残の夏を反射する
雲はまだ厚いのに

嵐の吹き返しの暑い風が胸倉を掴む
全てが成就されたのか答えろ、と

ゆっくりと首を振り、カタカタと回る扇風機の音が
遠い幼児の頃の寂しさをバラバラに呼び戻す

一体どうやって生きてきたか
どうしても思い出せない

一体何に執着してきたのか
どうしても思い出せない

過去はリセットされたのかもしれない
それ程どうでもよいものだったのかもしれない

あるいは自分自身にとっての偽善を
ひたすら大事に撫でてきたのかもしれない

今、希望があるかと問われれば
ある、と答えることができる

だが、それは何なのか、と問われたら
わからない、としか答えられない

もしかしたら、生まれたての赤子のように
無我に還る必要があるのだろうか

そのためには、殺すのではなく
死を通り抜ける必要がある

そのテーブルにナイフがある・・・

かつて世界がモノクロだった頃のような
みずみずしい未来は失われ
その代わりに雑然と散らばっている
色彩だらけの現在に埋もれている

(夏はまだここにある)

(2011.9.4)